

(様式5)

令和5年度 富山中部高等学校アクションプラン		- 1 -
重点項目	学力の向上	
重点課題	①教育目標の実現のため、深い学びを目指した授業を行う。また、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていく。 ②生徒がテスト等によって学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導助言を行う。	
現状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実を努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。	
達成目標	①互見授業を行ったり、授業力の向上を図るため、教科別授業研究会を行ったりする。 教育課程研究委員会において、実施状況をしっかり評価する。	②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し、実践できた生徒の割合（学習アンケート） 70%以上
方策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善をはかる。 ○教科を横断した授業を行ったり、特別編成授業を行ったりし、教科「情報」の理解を深める。 ○個々の学力や進度に応じた教材について、研究開発をさらに進める。	○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施し、テストを見直す意識を高めるとともに、その後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるPDCAサイクルの徹底を図る。 ○教師が常に自己研修に励み、担任や教科担当者による個別指導の充実を図る。
達成度	・各教科年間2回以上実施した。	・「テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れ実践しようとしている」と答えた生徒 70% (学習アンケート1月)
具体的な取組状況	《互見授業・教科別授業研究会》 1学期・2学期を通じて17人の教員が「授業研究のための互見授業」を行った。授業実施後には、教科別の協議会や授業研究会を持ち、生徒の学力、学習実態について分析するとともに授業力向上に向けた指導法の検討を行った。	
評価	A	《互見授業・教科別授業研究会》 ・互見授業を行い、授業改善につなげている。 ・各教科において2回以上の教科別授業研究会が実施され、その概要が報告されており生徒の主体的、対話的な深い学びを意識した授業方法の改善が検討されている。
	B	《テストの見直し、自主的な学習計画》 <1学年>テスト後の見直しをしている教科は、数学(70%)が3教科の中で最も高かった。見直しができない理由は、「次の課題や予習に時間をとられるから」が多い。 <2学年>11月、1月の実力テスト後の見直し授業をきっかけに、テストの見直しをする生徒の割合が増えた。地歴、理科への見直しの意識が低い。 <3学年>2年次と比較すると、大学進学が目前に迫るにつれ、見直し等、テストを有効に活用しようとする生徒が増えてきた。過年度と比べ、見直し割合は低かった。
学校評議員の意見	《互見授業・教科別授業研究会》 先生方のICTを活用した授業やアクティブラーニング等の取組は工夫してよくやっておられる。一方生徒もタブレット等をうまく使いこなしている印象がある。互見授業については教師だけで見合うのではなく、評議員等外部の視点もあるとよい。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 解説授業は大変いい取組である。学年が上がるにつれ、テストの見直しの大切さが生徒に浸透してきている。見直しを通じて自己分析、自己学習の高まりを期待したい。	
次年度へ向けての課題	《互見授業・教科別授業研究会》 ・新教育課程においては科目数の増加がある中で、単位数を増やさずに編成しており、アクティブラーニングやICTを最大限に活用して、生徒の主体的な学びを一層促進するとともに、教科別協議会や授業研究会を通し、授業での指導内容を精査していく必要がある。教科横断型の授業を計画し、実践予定である。 《テストの見直し、自主的な学習計画》 ・生徒自ら課題を見つけ、自主的に学習計画を立てることができるように、担任や教科担当者が、長期的な見直しを持って、段階毎に具体的なアドバイスを絶えず与えていく必要がある。 ・新教育課程で求められる観点別評価の趣旨をふまえ、生徒が立案した学習計画や学習実態を、担任や教科担当者との面接で把握し、学習内容の評価および指導を行う必要性が高くなっている。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

令和5年度 富山中部高等学校アクションプラン		－2－
重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重点課題	①広い視野に立ち、自己の将来像に連なる明確な進路目標を見つけさせる。 ②第一志望をあきらめず、難関大学への進学に向けて主体的に努力できる生徒を育む。	
現状	①全員が大学への進学を希望している。しかし、進路に関する視野が狭く、志望する大学や学部により偏りが見られる。男女問わず、より広い知識やグローバルな視点を持たせたい。 ②高い目標を維持させるために、具体的な目的意識やその達成に至る道筋の具体的ビジョンを得させることが必要である。	
達成目標	①自己の将来についてより広い視野に立って考えることができる	②難関10大学+国公立大学医学科への出願者および合格者の割合
	講演会・大学探訪・海外研修・探究活動を通して新しい学問分野や進路の存在を知る。 自分と自分をとりまく社会や世界についての理解を深め、それに基づいて自己の将来像を描く。	難関国立10大学と国公立大学医学科に出願し合格する ・3年在籍生徒数に対する出願率 55%以上 ・3年在籍生徒数に対する合格率 30%以上
方策	○2学年の7月に「アメリカ研修」、8月に「大学探訪」を行い、知的刺激を与え、視野を広げさせる。大学探訪では、大学生(卒業生)から話を聞き、具体的ビジョンを構築させる。 ○将来の社会的・職業的自立に向けて、1学年の生徒に対し進路講演会を行う。	○面接指導や学年集会、および進路に関する行事を通して、早い時期から高い進路意識を持たせるよう指導する。○第1志望への合格を実現させるために、教員全員の体制で添削指導や難関大講座などを展開し、生徒一人一人にきめ細かく支援する。
達成度	・「大学探訪」でも「アメリカ研修」でも、多くの生徒が刺激を受けたと答えている。	・出願率 52.2% (142/272) ・合格率 26.5% (72/272)
具体的な取組状況	<p><1学年> 県の企画「富山の企業魅力体験バスツアー」で県庁をはじめとする公的機関や北陸電力などの企業を見学したり、体験したりし、職業観を育て就業を見据えた文理選択や学部・学科、大学の選定に役立てた。社会の様々な分野(法律、起業、電子情報、機械、地域交通、デザイン等15分野)で活躍されている方々を招いて、進路講演会を実施した。</p> <p><2学年> 7月にアメリカ研修を実施した。ホームステイ語学研修のほか、現地大学や施設の見学を通して風土や価値観の違いをはじめ多くのことを経験し、視野を広げた。8月に大学探訪を実施した。東大生との懇談は生徒の意欲を大いに高めた。</p> <p><3学年> 高きを目指し授業を大切に、粘り強い学習を行うように、担任の面接や学年集会における生徒への日々の働きかけの中で繰り返し呼びかけた。定期考査や進学模試を通じて、PDCAサイクルでの学習を指導している。全教科にわたって、受験まで個別添削指導を行っている。</p>	
評価	B	《進路講演会・大学探訪等》 ・貴重な経験談や仕事のやりがいなど、参考になる話を多く聴くことができた。大学探訪ではキャンパスを歩き、先輩の話を聞くことによって多くの生徒が具体的な目標を得て、学習意欲を高めた。
	B	《進路希望の実現》 ・設定した目標値には届かなかった。来年度からの入試変更を受けて、全国的に安全志向と言われる中で、ほぼ例年同様の出願率を維持した。
学校評議の意見	《大学探訪・進路講演会》 進路講演会、大学探訪等、自らの人生を考えたり、職業観を育てたりするよい機会になっている。アメリカ研修は非常に良い試みである。知り合えた方々と交流を続けてほしい。	
	《進路の実現》 世界的な観点から進路選択をしてほしいことと、富山の発展のために、富山の企業(世界基準)への理解も深めてもらいたい。	
次年度へ向けての課題	《進路講演会》《大学探訪》《アメリカ研修》 ・生徒が主体的・積極的に各行事に臨むよう指導を続けたい。生徒の知的好奇心を刺激し、学問への根本的な意欲を醸成するよう工夫して事業を行いたい。	
	《進路の実現》 ・大学入試が大きく変更する中でもぶれることなく、進路選択をさせ、落ち着いて入試に臨ませる。教科「情報」の指導計画を具体的に立て、安心して受験できるよう支援する。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

令和5年度 富山中部高等学校アクションプラン		－3－
重点項目	読書指導・体力の向上	
重点課題	①読書指導を充実させ、図書館の利活用を促進する。 ②体力の向上に努めさせる。	
現状	①生徒は、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、デジタル媒体が浸透した生活スタイルや学校生活の多忙感により、読書の時間が減っていない状態である。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。	
達成目標	①年間1冊以上、図書館の本を借りた生徒の割合	②2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合
	40%以上	70%以上
方策	○1年次の図書館オリエンテーションで選書、貸出体験を行う。 ○探究的な学習活動に関連する図書を増やすことにより、生徒の興味や関心を高め、図書館の書籍の利用を促す。	○全学年、体育の授業時に毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。
達成度	・年間1冊以上、図書館の本を借りた生徒の割合 77.8%	・2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合 78.8%
具体的な取組状況	《読書・広報活動》 ・新入生に対して、図書館および読書オリエンテーションを図書館で実施し、選書・貸出体験を行った。 ・LHの中の読書の時間を担当する教員への説明会を行った。運営のヒントとなる事例や改良した読書ノートの使用法等具体的な内容とした。 ・探究活動や授業で使用する書籍購入や県立図書館や国立国会図書館の資料の借入れを9件おこなった。 ・3年生1学期の読書の時間に、図書館で各自の進路内容に関する新書の選書・貸出を実施した。	
	《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるように実施した。	
評価	A	《読書指導》 ・教職員の共通理解および図書委員の主体的な活動で、充実した図書活動を実施することができた。図書館利用者・本の貸し出し数は今年の1.4倍である。
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。

学校評議員の意見	《読書・広報活動》 大きな成果が得られ、大変よかった。次年度への課題、タブレットからの検索もぜひ前向きにお願いしたい。 時代に合わせ図書館の役割や活用方法も変わるのではないかと。オーディオブックも動画もYoutubeもあり、情報の獲得方法は多くある。むしろ、図書館の在り方を、朗読サークル、出前セミナー、書店との連携、作家の招聘、高志の国文学館との連携など、図書を貸し出す場から、人の集う場所に変容していくことを考えるのもいいのではないかと。	
	《体力の向上》 サーキットトレーニングによって、体力が向上していることや粘り強い精神力が身につけていることはよく分かる。運動習慣が生涯にわたって継続することにも繋がると思われ、生徒だけでなく教員の体力を向上する取り組みを行い、学校全体が身体を労る気遣いが盛り上がりれば良いと考える。	
次年度に向けての課題	《読書・広報活動》 ・図書館棟と教室棟が離れているため、生徒が図書館棟に足を運び、手軽に本を手にとれるように各自のタブレットから書籍の検索が出来るシステムの導入やDの時間との連携等工夫を続けていく必要がある。	
	《体力の向上》 ・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

令和5年度 富山中部高等学校アクションプラン		－4－
重点項目	学校行事・部活動の充実	
重点課題	①ホームルーム活動を充実させる。 ②部活動をより充実させる。	
現状	①ホームルームの時間においては、討論と読書を行っている。討論では、各ホームで決めたテーマについて思考を深め、意見交換を行っている。読書では年間の冊数を決めて様々なジャンルの本を読み、知識や教養を深めている。半期に一度の統一ホームルームでは、全校生徒が同一テーマについて話し合い、後日冊子にまとめている。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は自己実現あるいは人間的な成長のため、学習と部活動を両立させようと努力している。	
達成目標	①充実したホームルーム活動を行う。	②部活動に充実感を得た生徒の割合 *1、2年生部活動加入者を対象にした、2学期終了時のアンケート
		70%以上
方策	○討論や読書に対する取り組みについて、各ホームにおいて常に評価し、改善を図る。 ○統一ホームルームにおいて、ホームルーム運営委員会を中心に役割分担し、活発な意見交換を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。
達成度	・統一ホームルームにおいて、討論のための準備や運営など活発な意見交換を行えた。	・78%の生徒が充実感を持って活動している。
具体的な取組状況	《ホームルーム活動》 ・テーマ設定から討論の運営を自分たちで役割分担を決めながら行っていた。 ・ホームルーム読書では年間4～5冊落ち着いて読むことができた。 《部活動》 ・部活動の活動時間の確保に努めたり、環境の整備に取り組んだり、活動場所については有意義な活用方法などを生徒同士で意見交換を行いながら活動した。	
評価	A	《ホームルーム活動》 ・年間2回の統一ホームルームでは、同一のテーマを各ホームで様々な切り口で深く追究し、議論している。自分たちで運営し、活発に意見交換を行うことができた。
	A	《部活動》 ・各部の目標を見据え、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。全国大会・北信越大会で、好成績を収めた生徒が多かった。
学校評議員の意見	《ホームルーム活動》 読書会や討論会などは何度も回を重ねるごとに徐々に力がつくので今後も継続していただきたい。討論の時間は意見を言う人と言わない人の二極分化にならないように活発な意見交換となるよう希望する。 ホームルームの充実度の指標がよく分からない。	
	《部活動》 運動部も学芸部も様々な大会で優れた成績をあげている。活発な活動を評価したい。陸上競技部の活躍が素晴らしかった。女子駅伝は11月の県予選、12月の全国大会、ともに現地で応援した。生徒、卒業生、教職員の一体感を感じた。 これまでにない社会問題に取り組む部活動や「起業部」のようなものもあるとよいのではないかと。	
次年度へ向けての課題	《ホームルーム活動》 ・討論のテーマを設定する段階で、自分たちの身近なテーマや現在の社会情勢なども積極的に取り入れる。 人文社会系、科学系のテーマを1つずつ設定する。	
	《部活動》 ・部活動を通して生徒が人間的に成長することを期待するとともに、あらゆる知識と経験を積めるようにしていく。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

令和5年度 富山中部高等学校アクションプラン -5-	
重点項目	学校教育全体を通じた「探究力」の伸長
重点課題	①普通科課題研究において、外部との連携を強化する。 ②通常の教育活動に「探究モジュール」を位置づける。
現状	①課題研究の内容が多岐にわたり、外部の専門家と連携しながら、活動している。 ②探究科目において、探究活動に対する「探究モジュール」の位置づけができています。
達成目標	①各ホームが数カ所の外部機関と連携する。
	②普通教科に「探究モジュール」(「7つの力」をつけるためのユニット学習)を位置づける。
	①担当者や生徒で適切な連携先を探し、積極的に連絡をとり、専門的な活動を行う。
	②「探究力」の基礎となる「7つの力」を整理し、教科の特性を考えながら、各授業においてもそれらをつけるためのユニット学習を行い、学校の教育活動全体で「探究力」を向上させる。
方策	○普通科課題研究において、各班の課題に関して専門的な知識がある企業や機関と連携して、研究をすすめる。 ○外部機関と電話やメールでコンタクトを取り、来校してもらるか訪問するかして指導を仰ぐ。
	○基幹探究で行っているユニット学習を週2単位で実施する。 ○基幹探究で行っているユニット学習を普通科において通常授業の中でも行う。 ○新しく「7つの力」を養うユニット学習を開発する。
達成度	・8つの機関・企業等に来校して指導していただいた。また、15の機関・企業等より、訪問や電話、メール等で指導していただいた。 ・週2単位での実施は、概ねうまくいったが、グループ研究の時間がとれなかった。 ・その他は実施できなかった。
具体的な取組状況	《外部連携》2年普通科課題研究「SS探究Ⅱ」 ・普通科課題研究において、各班の課題に関して専門的な知識がある企業や機関と連携して、研究をすすめた。8事業所の方に来ていただいて指導していただいた。また、生徒が訪問したり、電話したりしてご指導いただいた事業所は15にもものぼった。計23事業所と連携した。
	《探究モジュール》 ・内容を精選し、探究基礎Ⅰを1ユニット4時間から3時間とし、探究基礎Ⅱを同様に6時間から4時間とした。
評価	A 《外部連携》 ・複数の企業の方から話を聞きながら、課題研究をすることで、内容が深まった。 ・積極的に外部機関に訪問する生徒が出てきた。 ・福島県の安積高校生と意見交換し、生徒が考えたロゲイニングを体験してもらった。
	C 《探究モジュール》 ・内容を精選することで、『探究モジュール』の重点項目が明確になった。 ・通常授業内で、モジュールを実施することができなかった。 ・新しいユニット学習の教材開発をすることができなかった。

学校評議員の意見	《外部連携》 2年普通科課題研究は大変興味深い新しい取組である。ロゲイニングという形の発表も面白く、生徒さんが作られた地図を見せていただいたが、大変緻密に考えられているのがよく分かった。Well-beingの向上という大きなテーマの中で、知力、体力、チームワークなども試され、地域の活性化にもつながった。企業連携はとてもよかった。同窓会としても全面的に協力できると思うので相談してほしい。
	《探究モジュール》 「探究力の伸長」をどのような指標ではかっているのかよく分からない。1ユニットの時間が減少しているようだが、内容の精選で減少したのか。
次年度へ向けての課題	《外部連携》 ・年間を通して、継続的に連携する。 ・年度を越えて、継続的に連携するための計画を立てる。 ・担当者の指導マニュアルを作成する。
	《探究モジュール》 ・通常授業で「探究モジュール」を取り入れた授業を実施するため、どの単元でどのモジュールを実施するかを整理する。新しいモジュールを作成するため、どの教科のどの単元に導入するのかを調査する。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった